１．　はじめに

2016 年に野球・サッカーに次いで、NBL、bj リーグが統合し、B.LEAGUE が発足した。日本のバスケットボール界は新リーグ開幕を機に大きく変わった。岐阜県にも B リーグに所属する B3 の GIFU SWOOPS は、ホームゲームでの試合運営はもちろん、地域に愛されるチームを目指すべくオフコートでの活動も多く行っている。

現在、JBA（日本バスケットボール協会）はバスケットボールの高校生世代での競技力向上と普及につなげるため、全国大会出場レベルの「強化層」、ブロック大会出場レベルの「準強化層」、残りの「普及層」の三層構造のリーグ戦を進めている。そして２０２１年から U18 日清食品ブロックリーグ、２０２２年から U18 日清食品トップリーグがスタートした。中には B.LEAGUE の U18 ユースが出場するブロックがあるなど、サッカーのリーグのように高体連とクラブチームの垣根を超えた試合が実現している。残りの普及層のリーグ戦に関しては、各都道府県のバスケットボール協会が主催し、高体連と協力し、県内リーグを任意で行っている。

２．　研究の目的

本県の高校生のカテゴリーはこれまで、IH 予選、ウィンターカップ予選、新人大会の 3 つの大きな公式戦と 5 つの地区での地区総合体育大会を行ってきた。いずれもトーナメント方式である。リーグ戦は公式戦の試合数が一定数確保できる、多くの選手が出場機会を得ることができる、実力が拮抗するチーム同士が対戦する、対戦相手を見据えた質の高い準備ができる、試合中の対戦相手の動きへの対応力向上という利点が挙げられる。一方トーナメントは、負けたら終わり、限られた選手しか出場機会がない、勝利至上主義になってしまうということが挙げられる。バスケットボールに限らず、部活動数、競技人口の減少は問題視されているが、次世代にバスケットボールの楽しさ、魅力を見出してもらうことは、我々指導者の大きな役割の 1 つであると強く思う。そこで私は、新たな取り組みとしてスタートしたこのリーグ戦はチャンスだと考えた。チームのユニフォームを着て、練習の成果を発揮する大会、試合数が増えれば救われるチームや選手は必ず出てくるのではないか、バスケットボールをもっと好きになってくれるきっかけになるのではないかと考えた。

本研究は、監督・選手がリーグ戦を通して思っていることや感じたことを明らかにすること、成果、課題、改善点等を出し、今後のリーグ戦の運営をよりよいものしていくことを目的とした。

３．　岐阜県のリーグ戦の変遷

令和 2 年度から試験的に始まったリーグ戦が、形を変えながら運営されてきた。令和 5 年度では、参加費を 1 部～3 部に応じて変えることで、上位リーグにおいて行われる白熱した試合に上級ライセンスの外部審判が付き、しっかりと公式戦として運営されるようになった。令和 6 年度においては新たに、3 部の中に昇格・降格には関わらないリーグが新設され、岐阜県内リーグが運営された。

４．　研究方法

(1)　調査方法　Web アンケート形式（Microsoft Forms）による調査　以下 QR コード参照
(2)　調査対象　県内リーグに所属する監督、選手（回答数：監督 71、選手 614）
(3)　調査期間　令和 5 年 12 月～令和 6 年 3 月
(4)　調査内容　【属　　性】①所属校、②所属チーム（男女）、③所属するリーグのカテゴリー
【質問項目】④リーグ戦の日程について（⑤自由記述）
⑥リーグ編成について（⑦自由記述あり）
⑧リーグ戦での選手の起用について（5 の選択肢）
⑨チームのモチベーションや取り組みについて（6 の選択肢）
⑩リーグ戦のメリット（10 の選択肢）

⑪リーグ戦のデメリット（8 の選択肢）
⑫今後のリーグ戦の扱いについて（5 の選択肢、⑬自由記述あり）
⑭リーグの位置づけについて（普及 or 強化）
⑮リーグ戦の良さについて（自由記述）

５．　結果と考察

（１）リーグ戦の日程について

リーグ戦の日程について「満足」という回答は監督で 73%、選手 87%と、どちらも高い数値を示しており、リーグの日程設定がよかったと考えられる。自由記述の中には、「試合と試合の間の練習で修正することができた。」、「他の公式戦の間の時期にあるので、実戦感覚を養うことができた。」などの回答があり、ゆとりある開催期間を設けて実施したことは有効であったとわかる。一方で、満足でないと回答した方の自由記述の中にあった選手の安全面のことを考えると、真夏の７月、８月に２試合をすることは早急に改善していく必要がある。

（２）リーグ編成について

「満足」と回答したのは監督が 89%、選手が 87%であり、どちらも高い数値を示した。自由記述の中には、「同じくらいのレベルのチームと試合することができるため生徒の満足度も高い。」、「地区以外の県内のチームと試合ができてよかった。」などの意見が多く、普及層のチームにとっては、大変満足度が高いことがわかった。一方で３部に所属しているチームの中にも、チーム力の差を感じるという意見が多くあるため、早速、リーグ担当者に申し出をし、令和６年度には交流リーグの新設の実現をすることができた。

（３）リーグ戦での選手の起用について

監督からは「いつもより選手の交代を意識的に行った」という回答が最も多く、45%だった。一方、選手からは「勝つために普段通り選手を起用していた」という回答が最も多く、65%だった。数値を見ると監督は、選手の交代を意識的に行い、なるべく多くの選手を試合に出そうとしていることがわかるが、選手はいつも通りの公式戦の選手起用と感じている。監督の意図と選手の捉え方にギャップがあるため、意思疎通を図り、チーム全体としてこのリーグ戦に取り組む必要があるのではないかと感じた。

（４）チームのモチベーションや取り組みについて

監督からは、「試合経験を積むことに重点を置いた」という回答が最も多く、84%だった。選手からは「チームとして試したいことにチャレンジした」が 47%、「対戦相手を研究し、リーグ戦に向けた練習を行った」が 44%、「試合経験を積むことに重点を置き、練習試合と同じ感覚で取り組んだ」が 35%という結果だった。監督、選手ともに、公式戦の数が一定数確保されているリーグ戦は経験値を積む良い機会と捉えている。

（５）リーグ戦のメリットついて

「ユニフォームを着て公式戦をする機会が増える」という回答が監督、選手ともに多く、ユニフォームを着て試合をする価値を見出している。また監督、選手ともに回答の割合が高かった項目として「その他の公式戦に向けた練習を試す機会が増える」、「他校の選手や部顧問同士の交流が増える」、「練習における短期的な目標ができる」が挙げられる。リーグの節間での練習が間延びせずに、短期的な目標ができることで監督も選手も日頃の練習の目的が明確化されることや、トーナメント形式の公式戦に向けた実戦経験を積むことにメリットを感じている。また、交流が増えることで人脈が広がる機会となっていることがわかる。

（６）リーグ戦のデメリットついて

監督からは「日程調整や審判の手配など運営による教員の負担が増える」という回答が最も多かった。さらに「学校行事や考査期間と重なる」という回答は監督、選手ともに多くあり、これらのことを考慮して、

リーグ戦を運営していくことは教員にとっては負担に感じている。選手からの回答として「交通費など金銭面での負担が増える」が 28%あり、リーグ戦において遠征を伴う場合が多くなるため金銭面での負担を減らす工夫は検討していく必要がある。

（7）今後のリーグ戦の扱いについて

「現状維持で３部のリーグに分け、昇格・降格を入れながら競争意識を持ち取り組む」に回答したのが、監督 66%、選手 77%と最も多く、おおむね現在のリーグ戦で良いと感じている。一方、「昇格・降格をなくし、バスケットボールの普及に向けて勝敗より経験値に重きをおいて取り組む」という回答も監督、選手ともに２番目に多いため、各チームの方針でリーグ戦に臨むことも大事であり、補欠選手の解消の課題は双方感じている。

（8）リーグ戦の位置づけについて

監督からは「普及」と「強化」、ほぼ半数ずつの回答だった。一方、選手は強化と捉えている選手の割合が若干高い。公式戦ではあるものの、監督は選手の起用を、その他の公式戦とは変えている意識があり、チームの強化も考えつつ、普及の側面も大切にしている。選手としては、公式戦で記録が残る以上、結果にこだわる意識が高く、監督と選手のリーグ戦に対する思いのギャップが小さくなるように監督は声掛けしていく必要があると感じた。

６．　研究のまとめ

リーグ戦の様子から、チームとしての目標を達成するために監督と選手、選手同士でコミュニケーションをとる姿が非常に印象的だった。また選手の交代も頻繁に行われていた。審判も外部の方と教員が一緒になることが多く、審判同士でコミュニケーションをとることでレフェリングの向上にもつながると感じた。

リーグ戦の良さは多岐に渡り、単にチームの強化やバスケットボールの普及に繋がるだけでなく、顧問同士の交流の場であり、他校の選手との交流の場になっていることがわかる。また一定数の試合が確保されているため、県内３大会がない時期のモチベーションの維持に効果的であり、練習の質の向上、目標の明確化などチームにとってプラスになる要素が多いことがアンケート結果からわかった。

リーグ戦が開始されてから４年、寄せられた意見の多くはポジティブな意見が多く、それぞれの立場でリーグ戦に対する価値を見出し、前向きに取り組んでいることがわかった。また公式戦の試合数が増えるので普段試合に出場できない選手の活躍の場ができること、他の公式戦までの期間に実戦経験を積むことができること、監督や選手のモチベーションが維持され日頃の練習の質が向上するなど多くの効果が期待できる。

選手からは、自由記述の中で「楽しい」、「チームの絆が深まる」、「次の対戦相手の対策をみんなで考える機会が増えた」、などの言葉が多くあり、主体的な部活動運営に役立っているのではないかと感じた。顧問の先生方からは当然運営上の改善点や日程への不満の声は多くはあるものの、拮抗した試合が増えることで生徒の満足感、達成感を目の当たりにすることや、先生方との交流の機会も増え、今後の部活動の指導に活かされるのではないかと推察した。

リーグ戦が岐阜県のバスケットボールの普及・強化につながるとともに、まだリーグが本格化できていない他県や他競技の関係者に共有し、リーグ戦が日本中で行われていくことで日本のスポーツ文化が発展することを望む。